

医学教育センター教員による平成30年度後期授業に関する 授業改善アンケート調査の解析結果

齊藤百合花 平林茂

帝京科学大学医学教育センター

Analyses of the results of questionnaire concerning the improvement of the lectures performed by
Center for Medical Education during the second semester in 2018

Yurika SAITOH Shigeru HIRABAYASHI

キーワード：授業改善、アンケート結果、相関性、満足感、理解度、授業以外の学習

【はじめに】

これまで、帝京科学大学のファカルティ・ディベ
ロップメント（FD）委員会では、学生の学習効果
を上げるための授業改善に向けて、学生にアンケー
ト調査を実施するなど数々の活動を行ってきた。し
かし、アンケート結果を実際の授業へどう活かすか
というフィードバック方法には様々な意見があり、
そのための解析法や取り組みの方法については、現
在なお検討中であり、FD委員会のみならず各学科、
総合教育センター、教職センターでも頻繁に議論が
されている。

平成29年度に、国家資格を学生に取得させるこ
とを大きな目標としている医療科学部への学習支援
を行うため、医学教育センター（以下、センター）
が発足した。今回、センターの教員が担当した科目
に関して行った授業改善アンケート調査の結果を、
千住キャンパス（以下、千住）と東京西キャンパス
（以下、東京西）とで比較解析し、今後、より学習
効果を上げるのに有用と思われる方策に関して検討
を行った。

【方法】

本学のFD委員会より配布された平成30年度後期
の授業改善アンケート結果を使用して解析を行っ
た。アンケート結果は、FD委員会が委託した業者
が集計したものである。大学全体でのアンケート回
答者の総数は29,172名（千住は19,263名、東京西は
9,909名）であった。

センター教員担当分に関する解析には、各科目担
当責任者がセンター教員である29科目のうちで、
2018年度（平成30年度）学生便覧において専門基
礎科目に分類される28科目の結果を用いた。28科

表1 授業改善アンケート結果解析使用科目一覧

キャンパス	授業コード	科目名	回答者数
千住	BG153	生理学Ⅱ	69
	BG155	解剖学Ⅱ	76
	BG252	神経内科学	61
	BG253	内科学臨床	61
	BG257	整形外科科学臨床	65
	BG271	公衆衛生学	67
	BG353	救急医学実践論	62
	BG354	画像診断学	68
	BH154	解剖学Ⅱ	86
	BH155	生理学Ⅱ	90
	BH254	身体の機能Ⅲ（生理）	72
	BH257	整形外科科学Ⅰ	71
	BH303	外科学Ⅱ	42
	BK157	臨床薬理学	72
	BK159	病態治療学Ⅰ	60
	BK171	生体機能学Ⅱ	70
東京西	AD152	解剖学実習Ⅰ	60
	AD254	臨床心理学	104
	AD257	神経内科学臨床	48
	AD258	精神医学Ⅱ	42
	AD302	臨床医学総論	111
	AF107	生理学Ⅰ	22
	AF113	解剖学Ⅰ	21
	AF154	内科学臨床	56
	AF155	整形外科科学臨床	106
	AF159	スポーツと傷害特性	60
	AF203	解剖学Ⅱ	26
	AF350	一般臨床医学Ⅱ	21

目のキャンパスごとの内訳は、千住は16科目、東
京西は12科目であり（表1）、回答者数は21～111
名であった。

アンケート項目を表2に示す。学生に配布された
アンケート内容は「質問および選択肢内容」である

表2 アンケート項目

項目番号	質問および選択肢内容	アンケート結果での表示項目
1	教員の言葉は全体として明瞭で聞き取りやすかったですか 5. 明瞭、4. ほぼ明瞭、3. どちらとも言えない、2. やや不明瞭、1. 不明瞭	声や言葉の明瞭性
2	板書やスライド、手本や見本は見やすかったですか 5. 見やすい、4. 比較的に見やすい、3. どちらとも言えない、2. やや見にくい、1. 見にくい	板書や資料等の見やすさ
3	プリント・スライド・VTR等の教材は、授業の理解を深めるのに役立ちましたか 5. 役に立った、4. 少し、3. どちらとも言えない、2. あまり、1. 役に立たなかった	教材の使用法の適切性
4	講義は講義細目の通りでしたか 5. その通り、4. ほぼその通り、3. 少し違った、2. かなり違った、1. 読まなかった	講義の細目との一致度
5	あなたはこの授業に積極的な姿勢で臨み、主体的に学びましたか 5. そう思う、4. ややそう思う、3. どちらとも言えない、2. あまりそう思わない、1. そう思わない	授業への積極性と主体性
6	教員は、私語について注意するなど受講環境の適切な確保をしましたか 5. 適切、4. ほぼ適切、3. どちらとも言えない、2. やや不適切、1. 不適切	授業の雰囲気
7	あなた自身にとって、各回の授業の量はどうか感じられましたか 5. 多い、4. やや多い、3. 適切、2. やや少ない、1. 少ない	各回の授業量
8	あなた自身にとって、この授業のレベルはどうか感じられましたか 5. 高すぎる、4. やや高い、3. ちょうどよい、2. やや低い、1. 低すぎる	授業のレベル
9	教員の熱意は伝わりましたか 5. 伝わった、4. ほぼ伝わった、3. どちらとも言えない、2. あまり伝わらない、1. 伝わらない	教員の熱意
10	授業方法は、あなたの理解度や到達度に留意し工夫されていましたか 5. 工夫されていた、4. 比較的工夫、3. どちらとも言えない、2. あまり工夫されてない、1. 工夫は見られない	授業方法の工夫
11	あなたはこの授業を通して、学ぶことの大切さや楽しさ（面白さ）を感じられましたか 5. 感じられた、4. やや感じられた、3. どちらとも言えない、2. あまり感じられなかった、1. 感じられなかった	学ぶことの大切さや楽しさ
12	あなたは授業内容をどの程度理解できたと思いますか 5. よく理解、4. ある程度理解、3. 少し理解、2. あまり理解できない、1. 全く理解できない	授業の理解度
13	あなたは予習・復習等、授業時間以外での学習をしましたか 5. よくした、4. ある程度した、3. 少しした、2. ほとんどしない、1. 全くしない	授業以外の学習
14	総合的に見て、この授業にどの程度満足しましたか 5. 満足、4. ほぼ満足、3. どちらとも言えない、2. やや不満、1. 不満	総合的満足度

が、教員に返却されたアンケート結果には、それらは「アンケート結果での表示項目」として表示されているため、本稿での項目の検討においては「アンケート結果での表示項目」を使用することとする。

アンケート結果では、各項目が1から5までの5段階で点数化され、それらの平均値が算出されている。今回の解析においては、全学とセンター間の比較や、千住と東京西の比較にはデータの分布形態に依存せず、中央値により2群間を比較するノンパラメトリック検定であるMann-WhitneyのU検定を用い、P値が0.05未満を有意差ありと判定した。

【結果および小考察】

1. 全学とセンター全体との比較（表3）

アンケート14項目のうち、教員の意識により改善が比較的容易であると考えられるのは項目1～4、6、9、10であるため、この7項目について

全学とセンターとの平均結果を比較した。なお、千住および東京西の両キャンパスを合わせた結果を「全体」として、全学およびセンター別に結果を示す。

上記1～4、6、9、10の7項目について、全学とセンターとの両キャンパス（全体）の結果を比較すると、項目4以外は全てセンターの平均値が有意に低かった。キャンパスごとに比較すると、千住では、7項目全てでセンターが有意に低かったが、東京西では項目4および6以外でセンターが有意に低かった。項目4については、後述の「2. センター教員担当科目ごとの平均値の分布」にて詳細を述べる。

センターの平均値が全学に比べて有意に低かった理由の一つとして、センター教員が医療科学部で担当する科目はほぼ全てが国家試験に関与するため、講義すべき必要内容量が決められており、かつ、合

表3 全学および医学教育センターにおけるアンケート結果の平均値

アンケート項目	全学			センター		
	全体	千住	東京西	全体	千住	東京西
1 声や言葉の明瞭性	4.23	4.21	4.26	4.03	3.98	4.11
2 板書や資料等の見やすさ	4.12	4.10	4.16	4.01	3.91	4.13
3 教材の使用方法的適切性	4.30	4.28	4.34	4.20	4.12	4.30
4 講義の細目との一致度	3.18	3.20	3.14	3.19	3.16	3.24
5 授業への積極性と主体性	4.09	4.09	4.08	4.05	4.00	4.11
6 授業の雰囲気	4.18	4.17	4.20	4.15	4.01	4.32
7 各回の授業量	3.50	3.52	3.45	3.67	3.74	3.59
8 授業のレベル	3.47	3.48	3.44	3.66	3.71	3.60
9 教員の熱意	4.15	4.14	4.18	4.06	4.02	4.11
10 授業方法の工夫	3.99	3.98	4.02	3.92	3.86	4.01
11 学ぶことの大切さや楽しさ	3.95	3.93	4.00	3.84	3.76	3.94
12 授業の理解度	3.84	3.83	3.86	3.68	3.58	3.81
13 授業以外の学習	3.19	3.21	3.14	3.30	3.15	3.50
14 総合的満足度	3.94	3.92	3.97	3.85	3.77	3.95

格のためにはそれ相応のレベルも要求されるという特殊な事情が関係している可能性がある。これに対して、全学の中には、国家試験とは無関係な授業も含まれている。

このため、上記7項目以外のうち、項目7「各回の授業量」および8「授業のレベル」について着目すると、センター全体、キャンパスごとのいずれにおいても、センターの平均値は全学と比較して有意に高かった。これは、センター教員の担当科目は全学の科目と比較して、学生にとって授業の量やレベルが負担に感じられる科目が多い実態を表していると考えられた。

2. センター教員担当科目ごとの平均値の分布 (図1)

各アンケート項目における各科目の平均値の分布を図1に示す。「千住+東京西」は千住および東京西で開講されている科目を、「千住」は千住で開講されている科目を、「東京西」は東京西で開講されている科目を示す。

(1) 教員の意識により改善が比較的容易であると考えられる7項目(1~4、6、9、10)について(図1)

A. 項目1「声や言葉の明瞭性」、2「板書や資料等の見やすさ」、6「授業の雰囲気」、9「教員の熱意」、10「授業方法の工夫」

これらの項目において、東京西では全ての科目が3.5以上に分布しているのに対して、千住では1~3科目が3.0~3.5の範囲にあった。

B. 項目3「教材の使用方法的適切性」

千住、東京西ともに3.5以上に分布しており、いずれの科目もプリント・スライド・VTR等の教材が、授業用に適切に準備され使用されていることが示唆された。

C. 項目4「講義の細目との一致度」

全ての科目で4.0を下回っていた。項目4の回答1は「読まなかった」という選択肢であり、回答1を選択した学生が多かったために4.0を下回ったと考えられた。そこで、各科目において回答2~5を選択した回答者数と回答から平均値を算出したところ、いずれも4.3以上であり、ほぼ「講義の細目と一致」して実際の講義が行われていた。

また、回答1の選択率を回答1の回答者数と回答1~5の全回答者数より算出したところ、全学全体では6.48%、センター全体では5.58%であった。キャンパス別に比較すると、全学では千住が5.67%、東京西が8.05%であり、センターでは千住が4.99%、東京西が6.53%であった。つまり、全学およびセンター担当科目ともに、東京西は千住に比べ「講義の細目」を「読まなかった」学生が多い傾向にあり、センター教員の担当科目では全学に比較すると「講義の細目」を「読んだ」学生が多い傾向にあった。これは、センター教員の担当科目に対する学生の関心の高さが関係しているのではないかと考えられた。

D. 項目6「授業の雰囲気」

項目6は表2に示すとおり、「教員が私語について注意をするなどの受講環境の適切な確保をしましたか」という質問であるが、千住では3.5未満の科

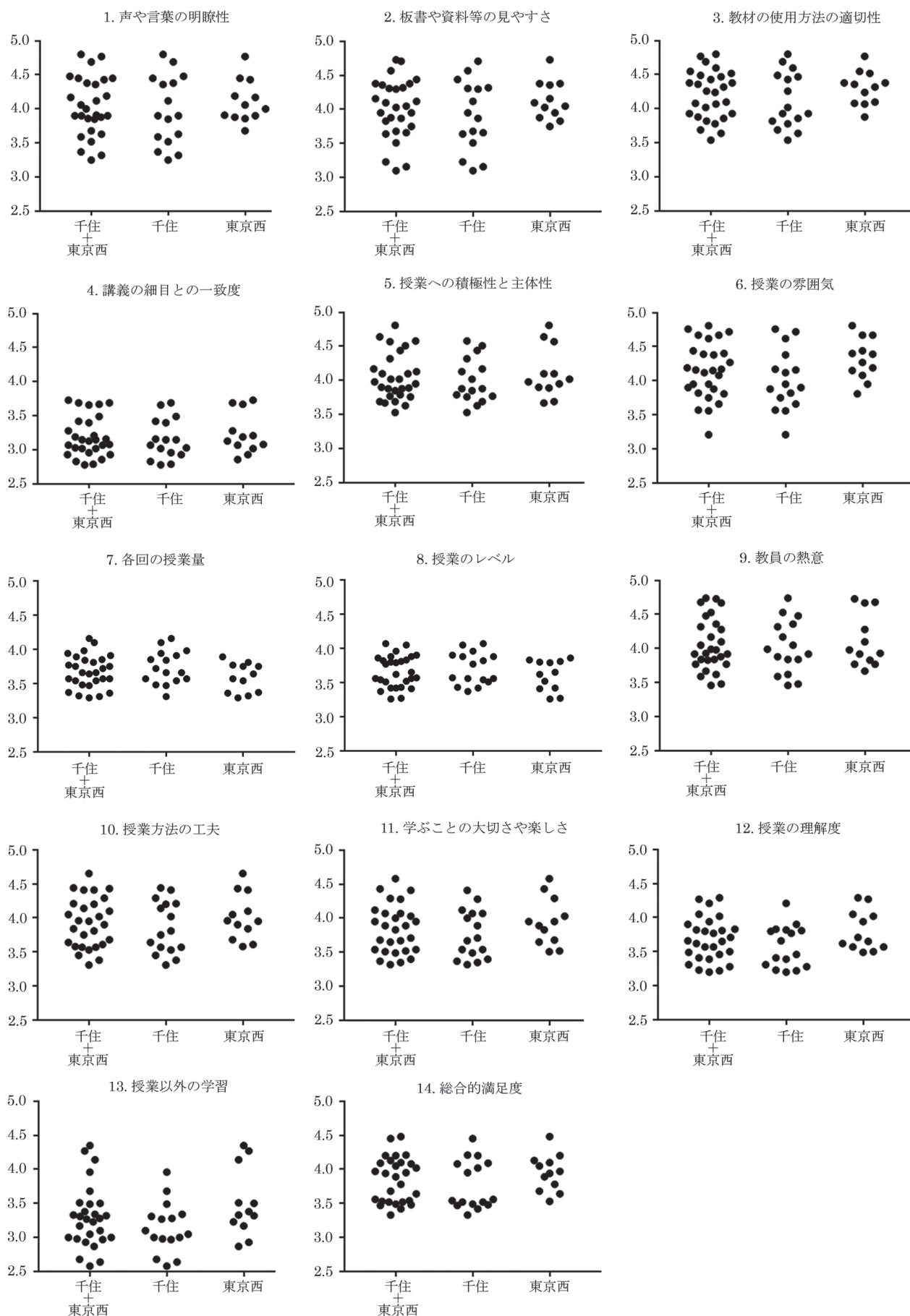


図1 各科目におけるアンケート項目1～14の平均値の分布

目が1科目存在した。この科目について有効回答数のうちの回答率を確認したところ、5「適切」が17.5%、4「ほぼ適切」が21.1%、3「どちらとも言えない」が38.6%、2「やや不適切」が10.5%、1「不適切」が12.3%であり、回答が分散していた。これは、授業当初は注意していたがあまりに不真面目な態度の学生が多いために注意するのをあきらめたか、あるいは、授業当初に注意しなかったところ不真面目な態度の学生が増えて徐々に注意する回数が増えた、といった、教員のモチベーションを落とすような学生の授業態度があった可能性がある。

ほかに項目6に関しては、千住に比べ東京西では有意に高く、東京西では「受講環境の適切な確保をした」科目が多いことが示唆された。また、個別に検討したところ、東京西で数値の高い上位3科目はいずれも4.5以上であり、これらは同一学科の同一教員が担当していた。

(2) 教員の意識のみならず、学生の資質によっても結果が左右され则认为られる項目5、7、8、11～14について(図1)

A. 項目5「授業への積極性と主体性」

いずれの科目も3.5以上に分布しており、多くの学生が各科目の重要性をある程度は理解し授業に臨んでいるのではないかと考えられた。

B. 項目7「各回の授業量」、項目8「授業のレベル」

全学とセンター全体との比較(表3)でも前述したとおり、センターの平均値は全学と比較して高い傾向にあり、特に千住の方が東京西に比べると7の「各回の授業量」および8の「授業のレベル」共に高いと感じている科目が多いことが明らかになった。これらの項目は、各学科のカリキュラム構成や授業時間数等にも影響を受けると考えられるが、3.0以上4.5未満に分布が収まっているのは、千住では学生が適切と感じるよりもやや程度が高めの講義が行われている可能性があると考えられた。

C. 項目11「学ぶことの大切さや楽しさ」

平均値が4.0以上の科目は、千住で6科目、東京西では4科目あった。センター教員の担当する科目は、各学科においても特に重要な科目に位置づけられているため、学ぶ大切さをセンターの教員が教えることは当然であるが、この項目11は医療科学部の学科教員も関わるべき課題であると思われる。

D. 項目12「授業の理解度」

千住では4.0以上の科目は1科目、3.5以上4.0未満の科目は7科目であり、東京西では4.0以上の科

目は4科目、3.5以上4.0未満の科目は7科目であった。この項目は、各学科のカリキュラム構成や授業時間数、履修者数等などの多くの要因が関与すると考えられるが、4.5以上となることが理想であり、そのためには教員側が具体的な工夫や改善策を考えるべきである。

E. 項目13「授業以外の学習」

全学、センターを問わず、全ての項目の中で平均値が最も低い項目であった(表3、図1)。正規の授業内で内容が理解できることが理想ではあるが、それができないのであれば、授業以外の学習時間を増やすことは当然であり、まずは学生自身が自らの課題として効果的な対策を考え、実行すべきである。しかし、学生自身ができないのであれば、教員が特別講義などの時間枠を設ける必要もある。

F. 項目14「総合的満足度」

東京西では全ての科目で3.5以上であり、千住に比較すると学生の満足度が高いと考えられた。また、千住では分布が3.5周辺と4.0周辺の2極化が見られた。3.5周辺群には9科目、4.0周辺群には7科目が該当した。3.5周辺の9科目について、更に該当学科および担当教員に関して詳細に検討したところ、3学科で6人の教員が該当した。特に学科に関しては、9科目のうち6科目が同一学科の2(4科目)・3(2科目)年生であり、4人のセンター教員が担当していた。

これらの担当教員4人に関して検討したところ、前年度は同一教員による同一科目で4.0以上、あるいは他の授業で3.9以上を得点していた。前年度の同一科目で4.0以上を得点していた科目の教員の中には、今年度の学生の質が例年に比べて非常に悪いと報告していた教員もあり、これに呼応してか、教員の熱意も前年度の4.12から3.84へと低下していた。

以上の結果から、「総合的満足度」の評価は教員側の要因に依存するというよりは、むしろ、学生の質の差に影響される可能性が大きいと考えられた。

3. 各項目の関連性の検討

学生が有意義な学生生活を送るためには、学生が授業において重視する項目をセンター教員が把握しておくべきであると考え、各項目の関連性を検討した。関連性は各項目との相関係数を算出し、相関性として検討した。相関係数はExcelソフトにより線形近似を行って算出した決定係数から簡易的に算出した。一般的な相関係数と相関性の対応は表4のと

表4 一般的な相関係数と相関性の対応（文献1より）

強い相関あり	$0.7 < \text{相関係数} \leq 1$
相関あり	$0.4 < \text{相関係数} \leq 0.7$
弱い相関あり	$0.2 < \text{相関係数} \leq 0.4$
ほとんど相関なし	$0 \leq \text{相関係数} \leq 0.2$

おりであり¹⁾、「影響する」という単語は「相関がある」と同義として使用した。

(1) 項目14「総合的満足度」に影響する項目（表5）

項目14の学生の「総合的満足度」は、学生生活において良質な環境であることを判断する指標になると考えられる。項目14と各項目との相関係数を

表5 項目14「総合的満足度」への影響とその項目

順位	千住		東京西	
	相関係数	項目番号	相関係数	項目番号
1	0.963	10	0.925	11
2	0.960	11	0.901	10
3	0.956	3	0.852	5
4	0.925	12	0.851	1
5	0.920	1	0.832	12
6	0.912	2	0.802	13
7	0.885	9	0.789	9
8	0.873	4	0.653	3
9	0.846	5	0.622	4
10	0.838	6	0.591	6
11	0.714	13	0.586	2
12	0.196	7	0.149	8
13	0.089	8	0.087	7

表5に示す。

両キャンパス共に、項目14の「総合的満足度」にはほとんど影響しないと考えられる項目は7「各回の授業量」および8「授業のレベル」であった。7、8以外の項目は、強弱はあるが、全て「総合的満足度」に影響することが明らかとなった。しかしながら、内訳は千住と東京西で異なり、満足度に強く相関すると考えられた項目は、千住では1～6、9～13の11項目であったのに対し、東京西では1、5、9～13の7項目のみであった。両キャンパスで上位2位を占めたのは10の「授業方法の工夫」と11の「学ぶことの大切さや楽しさ」であった。

「総合的満足度」の評価は学生の質の差に影響される可能性が大きいことを認識しつつも、以上の結果より、総合的満足度を上げるためには、教員が意識することで改善できる7つの項目をまず積極的に改善すべきであると思われる。

(2) 項目11「学ぶことの大切さや楽しさ」に影響する項目（表6）

項目14「総合的満足度」に強く影響を与えた項目11「学ぶことの大切さや楽しさ」と、各項目との相関性を検討した。項目11と各項目との相関係数を表6に示す。

表6 項目11「学ぶことの大切さや楽しさ」への影響とその項目

順位	千住		東京西	
	相関係数	項目番号	相関係数	項目番号
1	0.982	10	0.965	10
2	0.963	3	0.941	5
3	0.954	12	0.938	9
4	0.943	2	0.917	13
5	0.942	1	0.896	1
6	0.904	9	0.841	12
7	0.888	6	0.770	4
8	0.857	5	0.716	2
9	0.849	4	0.715	3
10	0.709	13	0.699	6
11	0.242	7	0.363	8
12	0.124	8	0.263	7

両キャンパス共に項目11にほとんど影響しないか弱く影響すると考えられる項目は、7「各回の授業量」、8「授業のレベル」であった。7、8以外の項目は、全て項目11に強く影響することが明らかとなった。最も強く影響するのは10の「授業方法の工夫」であった。10以外で強く相関すると考えられた項目は、千住では1～6、9、12、13の9項目であったのに対し、東京西では1～5、9、12、13の8項目であった。特に、13の「授業以外の学習」は、東京西においては相関係数が0.917と高く、千住の結果とは大きく異なっていた。

(3) 項目5「授業への積極性と主体性」に影響する項目（表7）

項目5「授業への積極性と主体性」と各項目との相関係数を表7に示す。

千住では8「授業のレベル」がほとんど影響しない項目であったが、東京西では全ての項目が影響しており、特に8の「授業のレベル」は7の「各回の授業量」よりも強く相関していた。また、東京西では項目13「授業以外の学習」の相関係数が0.981と非常に高く、13の「授業以外の学習」をした学生ほど、項目5の「授業への積極性と主体性」があったと回答したことが分かる。よって、千住では、

表7 項目5「授業への積極性と主体性」への影響とその項目

順位	千住		東京西	
	相関係数	項目番号	相関係数	項目番号
1	0.857	11	0.981	13
2	0.856	3	0.944	10
3	0.828	12	0.941	11
4	0.811	10	0.908	9
5	0.797	1	0.908	1
6	0.794	6	0.840	4
7	0.785	4	0.808	12
8	0.764	2	0.787	6
9	0.746	9	0.776	2
10	0.721	13	0.772	3
11	0.269	7	0.494	8
12	0.020	8	0.335	7

「授業を通して学ぶことの大切さや楽しさが感じられた」学生が「授業に積極的な姿勢で臨み、主体的に学んだ」傾向があると言えるが、東京西では、「予習・復習等、授業時間以外での学習をした」学生が「授業に積極的な姿勢で臨み、主体的に学んだ」と回答したと考えられる。

また、項目9の「教員の熱意」との相関性について両キャンパスを比較すると、千住では0.746であるのに対し、東京西では0.908と高かった。そのため、千住に比べ東京西では、「教員の熱意が伝わる」授業であるほど、「授業に積極的な姿勢で臨み、主体的に学んだ」と回答した学生が特に多いと考えられる。

(4) 項目12「授業の理解度」に影響する項目(表8)

項目12と各項目との相関係数を表8に示す。

項目12は「授業の理解度」であり、理想的な値は5であることは明白であり、センター教員の担当科目については、特に重要であると考え、授業の改善を行うべきである。

項目12に関して、両キャンパスとも最も相関が強かったのが項目11の「学ぶことの大切さや楽しさ」であった。特に、千住では相関係数が0.954と非常に高く、「授業を通して学ぶことの大切さや楽しさが感じられた」学生ほど、「授業内容を理解できた」と感じていることが分かる。

また、千住では項目13「授業以外の学習」の値が0.588であり、相関は見せたが、「予習・復習等、授業時間以外での学習をした」学生であるからといって、「授業内容を理解できた」と感じているとは限らないと考えられた。一方、東京西では項目

表8 項目12「授業の理解度」への影響とその項目

順位	千住		東京西	
	相関係数	項目番号	相関係数	項目番号
1	0.954	11	0.841	11
2	0.920	10	0.815	4
3	0.900	1	0.808	5
4	0.892	3	0.776	9
5	0.879	2	0.759	13
6	0.828	5	0.752	1
7	0.820	4	0.740	10
8	0.816	6	0.628	3
9	0.813	9	0.563	6
10	0.588	13	0.441	2
11	0.113	8	0.131	7
12	0.026	7	0.017	8

13の値は0.759であり、「予習・復習等、授業時間以外での学習をした」学生の多くが「授業内容を理解できた」と感じていることが示唆された。

項目12に関しては、キャンパス間で相関性に差が出た項目がいくつかあったが、その中でも項目2の「板書や資料等の見やすさ」と3の「教材の使用方法的適切性」は、千住では強く相関するという結果であったのに対し、東京西では相関するという結果に留まった。これは、千住の学生は授業の教材について興味があり、授業内で理解しようとする姿勢が強いのにに対し、東京西の学生は授業の教材についてはそれほど興味がないとも考えられた。特に、千住では1～9位の9項目が強く相関していたのに対し、東京西で強く相関したのは7項目に留まり、1位の項目でも千住の上位5項目より相関係数は低かった。よって、千住では正規の授業自体が大切であると学生が理解しているのに対し、東京西では正規の授業自体の大切さを十分に理解していない可能性があり、正規の授業に対する姿勢の違いがあるのではないかと考えられた。

(5) 項目13「授業以外の学習」に影響する項目(表9)

項目13「授業以外の学習」と各項目との相関係数を表9に示す。

項目13に関してはキャンパス間で最も大きな差が見られた。千住では全ての項目で影響があるとは言えるものの、最も高い数値でも0.732であったが、東京西では項目1、5、9、10、11の5項目で相関係数が0.900以上と、非常に強く影響していた。

特に両キャンパスで異なったのは、項目7の「各回の授業量」であった。千住では「各回の授業量」

表9 項目13「授業以外の学習」への影響とその項目

順位	千住		東京西	
	相関係数	項目番号	相関係数	項目番号
1	0.732	7	0.981	5
2	0.721	5	0.918	10
3	0.709	11	0.917	11
4	0.705	3	0.910	9
5	0.700	10	0.900	1
6	0.693	6	0.789	4
7	0.686	1	0.759	12
8	0.676	9	0.729	6
9	0.588	12	0.718	2
10	0.583	2	0.662	3
11	0.505	8	0.531	8
12	0.446	4	0.400	7

が多いと感じた学生ほど「授業以外の学習」をしたのに対し、東京西では「各回の授業量」にはほとんど影響を受けなかった。これは、千住では試験を見込んで勉強すべき状況であることを自ら把握できている学生が多いが、東京西では把握できない学生が多い可能性があると考えられ、学生がすでに身に付けている学習習慣の違いが反映されていると考えられた。

一方で、東京西では千住と比べて、項目9の「教員の熱意」を感じた学生ほど、「授業以外の学習」をしていた。センターでは、医学教育セミナーと命名した補講や補習を、両キャンパスともに各学科の求めに応じて積極的に行っている。特に東京西では、半強制的に「授業以外の学習」を義務付けている科目が多く、このことが「教員の熱意」を感じるという結果に繋がっているとも考えられる。しかしこれは、東京西では大学入学前に自ら勉強するという習慣を身につけていない学生が多く入学していることを示している可能性もある。ただし半強制であっても、その状況下で自ら学習することを望み実行できている学生は、勉強するという目標の達成に取り組んでいるため、それをきっかけとして勉強を楽しいと感じ始める可能性もあり²⁾、今後の経過を見守っていく必要がある。

【考察】

平成30年度後期のセンター教員担当科目に関するアンケート調査で明らかになった点を総合的にまとめると、両キャンパスの共通点として、学生のモチベーションを高く維持するために必要なのは、

「学ぶことの大切さや楽しさ（面白さ）」を感じられる授業であり、それは「授業方法が学生の理解度や到達度に留意して工夫されている」ことに影響を大きく受けているということであった。今回のアンケート対象となったのは、卒業時に国家資格を取り将来は臨床の場で働くことになる医療科学部の学生である。このため、各科目を学ぶことは、国家資格を取得するうえで、さらに将来の臨床の場においても大切であることを、職場の実情に即して説明しつつ、しっかりと理解させることが重要であると考えられる。つまり、国家資格を得て将来自分が臨床の場で働く姿を絶えず想起できるような授業が望ましいということである。

しかし、センター教員が担当する解剖学、生理学などの基礎専門科目では、直接臨床での重要性に直結させて学ぶことの楽しさ（面白さ）を感じさせることは難しいのが実情である。さらに、覚えるべき専門用語の多彩さや難解さが加わることにより、学生に理解させ一定のレベルに到達させることは、いっそう困難である。このため、臨床の場での基礎専門科目の重要性を十分に理解している学科教員と連携し情報を交換するとともに、学科教員からも基礎専門科目の重要性を学生に説明してもらうことが重要である。最近、学科教員の中には、いったん臨床を経験してから大学院や実習参加を通して学習を重ね、センター教員の担当科目が重要であることを実感する教員もおり、こうした経験を持つ学科教員が増えることも、最終的には授業の改善に繋がるのではないと思われる。

今回の調査において、千住では「授業を通して学ぶことの大切さや楽しさを感じられた」学生が、また、東京西では「予習・復習等、授業時間以外での学習をした」学生が、それぞれ「授業に積極的な姿勢で臨み、主体的に学んだ」と回答したと考えられた。東京西における「授業時間以外での学習」の中に、医学教育セミナーなどの特別講義が含まれているとすれば、これらのセミナーが学生の学習意欲の向上に一定の効果があることを示すとともに、一方では、正規の授業では理解できず、また、自ら勉強する習慣がついていない学生が東京西では多いことを表しているとも考えられる。これらの学生は自制心が低い学生とも言え、教員が半強制的な特別講義の場を設け学生を参加させる必要がある。自制心が強い者ほど強い友情で結ばれ、困難な状況に適切に対処する力があるという報告³⁾がある。自制心を身に付けることは、卒業後に臨床の場に出た際に医療

従事者として自らが生涯勉強する心構えを持つことにもなり、学生自身にとって重要である⁴⁻⁶⁾。自制心を身につけるためには、自らの自制心が低いことを自覚し、具体的な将来像を描いた上で何が不足しているのかを明らかにし、それを解決するためのトレーニングも必要である⁷⁾。

東京西の学科によっては、これまでの授業改善アンケート結果を分析した上で積極的に授業改善に努めている学科があり、FD委員会への報告によると、該当学科のアンケート結果は各項目全般において年々向上傾向にある⁸⁾。その学科が行っている対策の1つとして、本稿の解析では含めなかったフレッシュセミナーIでの方法が参考になると考えられる。その内容をシラバスで確認すると、授業の受け方や勉強の仕方を含め有意義な学生生活を送るためのアドバイスや、卒業後に臨床の場で働く姿も見据えた具体策などが講義されているとのことである。この授業の「満足度」や「学ぶことの大切さや楽しさ」の平均値は4.19、4.30と高いことから、非常に意義のある授業となっていると考えられる。このように、授業改善アンケート結果を参考にして、学生に必要なかつ具体的な対応策を取ることは、学生のみならず大学の質の向上にもつながると考えられる。しかしながら、反面、このような取り組みは教員の善意・努力によるものが大きく、負担も大きくなりやすいため、教員の労働環境にも影響が出る恐れがあることも考慮しておく必要がある⁹⁾。

FD委員会で問題になっている「授業以外の学習」について、センター教員の担当科目においては、千住では満足度にも理解度にも大きな影響を与えないという結果が出た。したがって、「授業以外の学習」を強制的に増やすよりも、教員が意識して変えることのできる授業自体の進行の仕方に改善を加えることを当初の目標とするのが良いと考えられる。それにより、「学ぶことの大切さや楽しさ」が分かるようになれば、いずれ学生は自ら「授業以外の学習」をする学生へと変わっていくのではないと思われる。そのためにも、例えば卒業前に学生にアンケートを取り、大学生活でもっと「授業以外の学習」をやっておけばよかった科目や「授業以外の学習」をやっておいてよかったと思う科目を明らかにすることで、下位学年の学生に科目や「授業以外の学習」の重要性を伝えやすくなり、参考になると思われる。

一方、東京西では教員による半強制的な「授業以外の学習」が多いことが満足度や理解度に大きく影響することから、「授業以外の学習」を強制的に増やすことを当初の目標としても良いと考えられる。これは、東京西では、教員が熱意を持って行った授業では、学生は「授業に積極的な姿勢で臨み、主体的に学んだ」と回答していることから、妥当な方策と考えられる。しかし、これは、正規の授業の重要性を十分に説明し、本来はそれを通じて学習する努力をまずすべきであることを学生に理解させたうえでのものでなくてはならず、安易に補講や補習に頼ることがあってはならない。

授業改善を包括的に行うためには、教員の増員、入学選抜法の見直し、カリキュラムの変更なども考慮に入れる必要があり、キャンパス間での学生の質の差も考慮しつつ、適切な評価に基づいて長期的な取り組みを行うことが重要であると考えられる。本論文には、半期での授業に関するアンケート調査の結果のみからの考察という一定の限界があることから、今後はさらにデータを蓄積していく予定である。

【引用文献】

- 1) 金城俊哉：R統計解析パーフェクトマスター、秀和システム、東京、2017
- 2) M. チクセトミハイ、今村浩明：フロー体験 喜びの現象学、世界思想社、京都、1996
- 3) シーナ アイエンガー、櫻井祐子：選択の科学 コロンビア大学ビジネススクール特別講義、文藝春秋、東京、2010
- 4) 梅方久仁子：医療・看護の資格と仕事 やりたい仕事ができる本、技術評論社、東京、2014
- 5) ヴィットインターナショナル企画室：知りたい！なりたい！職業ガイド リハビリにかかわる仕事、ほるぷ出版、東京、2009
- 6) コンデックス情報研究所、陶山哲夫：医療系療法士をめざす本、成美堂出版、東京、2006
- 7) 高橋久：はじめてのカウンセリング心のたんけん③なりたい自分になるために、学研教育出版、東京、2006
- 8) 平成30年度後期 授業改善アンケートの概要、帝京科学大学FD委員会、2019
- 9) 前屋毅：ブラック化する学校、青春出版社、東京、2017

